

営農ウィークリーNEWS

耐高温性品種「にこまる」の紹介

今年は京都市においては、8月の平均気温30.3℃（観測史上2番目）、9月の平均気温27.7℃（観測史上最高）と水稻栽培にとってはたいへん厳しい年となりました。

白未熟粒（乳白粒、背白粒、基部未熟粒）は、でんぷん蓄積が不良となり、でん粉粒間に隙間ができて乱反射で白く見えているもので、出穂後20日間の平均気温が27℃以上で増加すると言われていました。2023年は、まさに水稻の早生から中晩生の品種全てで、登熟期がこの高温期に遭遇したため、各品種で高温障害を受けました。しかし、「にこまる」は、高温障害がほとんどありませんでした。

2023年JA京都中央管内の米検査結果（11月1日までの数値）

	1等	2等	3等
袋数	393	4,809	4,521
割合（%）	4.0	49.5	46.5

「にこまる」は「ヒノヒカリ」より粒が大きく収量も同等以上



「にこまる」の特徴

- 1 高温下でも白未熟粒の発生が少ない。食味は「ヒノヒカリ」並み。
- 2 「ヒノヒカリ」に比べ、出穂期は2～3日遅く、成熟期は3～5日遅い。
- 3 収量は「ヒノヒカリ」より5～10%多く、玄米粒は「ヒノヒカリ」より大きい。
- 4 「ヒノヒカリ」に比べ、発芽、苗の伸長が早く、移植後も苗の伸長も大きい。

[その他詳しくは裏面へ](#)

TAC information

土壤改良資材は稲株すき込み時の秋に



近年、田植え後に、未熟な稲株など有機物が水温の上昇とともに嫌気発酵して、水田土壌が還元状態になり、根腐れが生じて生育障害になるケースがしばしば見られています。

微生物はpHが6～7付近で活発に活動するものが多いため、アルカリ性資材を施用することにより、有機物の腐熟が促進されます。「石灰窒素」のほか、「とれ太郎」「ようりん」などのアルカリ性資材も秋耕時に施用すると有機物の腐熟促進に効果があります。肥料成分は、秋、春施用で効果に大きな違いはありません。

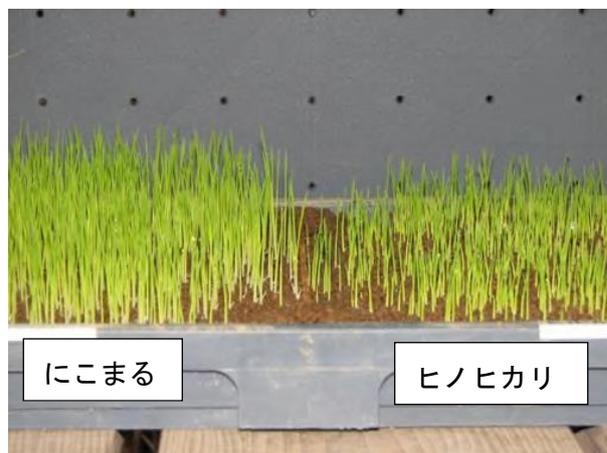
「にこまる」の栽培留意点

- 1 「ヒノヒカリ」より出穂期が2～3日遅く、成熟期も3～5日遅い。追肥は「ヒノヒカリ」より2～3日遅めに行う。
- 2 「ヒノヒカリ」に比べ、発芽、苗の伸長が早く、移植後も苗の草丈の伸長も大きい。そのため、「ヒノヒカリ」より早く緑化を開始し、硬化も苗長2cm程度で行う。苗を伸ばしすぎると軟弱な苗になるので注意する。
- 3 栽植密度、施肥量は「ヒノヒカリ」に準じる。中干しの開始は「ヒノヒカリ」より2～3日遅くする。
- 4 成熟期は「ヒノヒカリ」より葉の枯上りが遅く、葉の緑が保たれるため、籾の黄化で判断する。遅刈りした場合の品質低下は「ヒノヒカリ」より少ない。

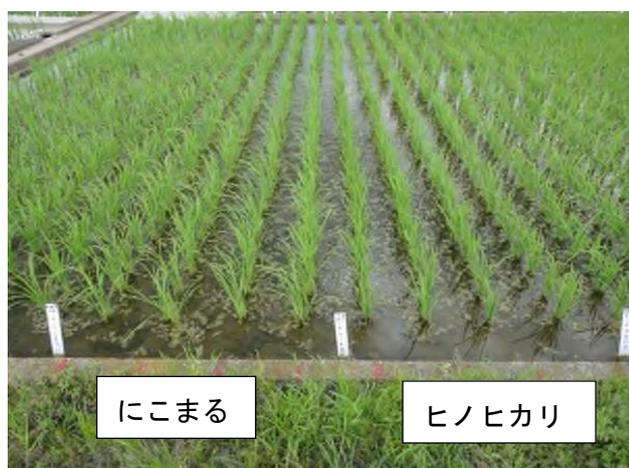
< 「にこまる」と「ヒノヒカリ」の生育比較 >



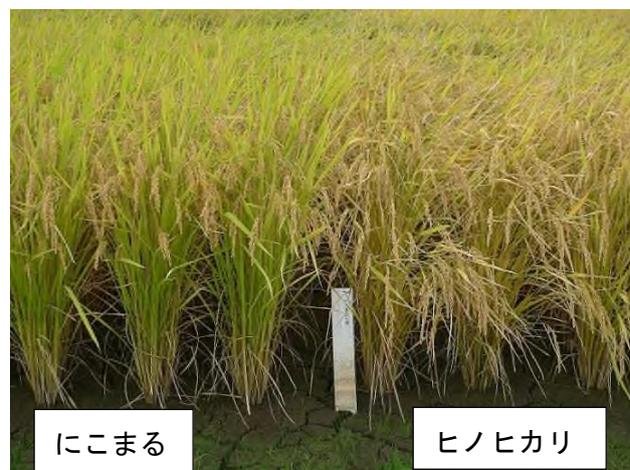
このくらい伸びたら「にこまる」は育苗器から出し緑化を行う。(写真提供長崎県)



芽長2.5cmで被覆をはがし、硬化させる。この写真は伸ばしすぎ、徒長してしまう。(写真提供長崎県)



ヒノヒカリに比べ、葉が長く垂れやすい。浅水で管理して伸び過ぎを押さえる。



ヒノヒカリに比べ、下葉の枯上りが遅い。成熟期は籾の黄化で判定する。